

アジア太平洋研究科 博士学位論文要旨

沖縄戦下の朝鮮人と「性 / 生」のポリティクス
—記憶の場としての「慰安所」—

学籍番号 4004s021-1

洪 玟伸 (ホン ムンジン)

主指導教員 後藤 乾一

Keywords: 沖縄戦, 日本軍「慰安所」, 辻遊郭, 朝鮮人, 沖縄人, 米軍収容所

私は1945年の帝国日本の敗戦と朝鮮の植民地解放の歴史を、いま、改めて考察しなければならないと考えている。それは無論、この時点が「宗主国」日本と「植民地」朝鮮という枠組みが崩壊し、さらに、戦後新たな国家形成過程のなかにアメリカが入り込むことによって、いわゆる「民主主義」のイメージが言葉として浮遊しているなかで、「加害国」と「被害国」、日本と韓国、が作り出された重要な時期であったためである。しかしそれだけではない。同時にこの時期、この加害と被害の「国家」という図式、人種・民族・階級、あるいは性などを根拠とする枠組みが誕生する際に、そこから外されている人間の存在を浮かび上がらせることが必要であると考えているからだ。

そこで注目したのが沖縄である。筆者は、沖縄を、こうした「心情の分岐点」において、国家、人種・民族・階級、あるいは性の二分法のなかでは説明し切れない、「朝鮮人」「沖縄人」「日本人」「米軍」が混在した空間として注目している。特に朝鮮人「慰安婦」の体験が重要である。朝鮮人「慰安婦」は分断された韓国で「韓国人女性」となった。今までフェミニズム研究でも広く指摘されてきたように、「慰安婦」問題が浮上したのは90年代でそれまで彼女たちは、いわゆる「帝国日本」の兵士に「性」を提供した女性として、または、「純潔」を守れなかった女性としての沈黙を強いられた。筆者は彼女たちの経験は、「ナショナリズム」や「国民国家」をテーマにする緒学問で語らなければならない重要な観点を示唆するものとする。

しかし、筆者は朝鮮人「慰安婦」の体験、「慰安婦」本人の体験を通して、「被害」の実態を明らかにするというより、彼女たちを動員した日本軍「慰安所」が、沖縄という「朝鮮人」「沖縄人」「日本人」「米軍」とが混在する空間で、どのように「加害」の連鎖を引き起こしているのか、そのポリティクスに注目したい。戦争責任は単なる日本の植民地化やアジア太平洋戦に留まらず、その後の米軍占領という新たな占領にまでつながる「構造的なもの」とであると、筆者は考えている。そしてそのことを「慰安所」が設置された村の変容を通して考える。

筆者は、そこに、「住民」という「慰安婦」を見た人々に焦点を当ててみることにした。沖縄はよく、日本で唯一の「地上戦」が行われた場所として語られる。しかし、同時に、そこは130カ所以上という数の「慰安所」が建てられた場所でもあった。その数の多さは、韓国ではよく、「帝国日本の加害性」を語る場所として言及される。また、沖縄では「準外地」とされてきた日本との関係の中で差別されつづけてきた「近代」の歴史を語る場で用いられる場合が多い。近年、韓国と沖縄の交流が活発になりつつあるが、すると、これらの事例は、韓国と沖縄の「連帯」を語る場に、帝国日本の「加害性」とともに訴えるために登場するようになった。

しかし、筆者はこれらの単純な語りでは、アジア太平洋戦争の体験を「被害者」の立場から出発した「共感」で語り合うことはできても、植民地化、日本の軍事占領、米軍占領へと繋がる構造的な「軍隊」による暴力そのものに対する観点を議論し合う、「認識論」を見据えることはできないと考える。

第一部では、アジア太平洋戦争期に朝鮮から沖縄に動員された人々を論じる前に、これら二つの地域がいかに歴史的、文化的に影響を与え続けてきた地域なのかを、「朝鮮と琉球」の関係史の中で示した。(1章)それは、前述のアジア太平洋戦争の「被害者」として

の韓国と日本の「連帯」に留まっている現状を、歴史や文化を視野におき接近することを提起するとともに、「人間の交流史」の観点から沖縄という地域史を韓国に伝えたい筆者の願いからであった。というのは、第一部(2章)で分析している通り、韓国において朝鮮と琉球の交流史は、「学問」という領域では、「琉球」という前近代の歴史は、現在米軍基地を抱える「沖縄」の歴史と全く異なる地域であるかのように伝えられてきたためである。韓国人一般に、「朝鮮」史は、植民地になる前の輝いた時代として、また沖縄人においても「琉球」史とは、「武器を持たない時代」であったとの幻想的なイメージとして伝わっている。筆者はその「幻想」を共有したいわけではなく、昔から繋がる歴史的な延長線の中で、戦場体験を過去の文化と密接に関わりをもつ「人間の体験」として語ることが本研究の目的とした。

第二章では、(3章・4章・5章)慰安所設置をめぐる日本軍部と沖縄県との関係性、沖縄人と朝鮮人との関係性などを、日本軍の『陣中日誌』や『石兵団会報』などの軍資料と設置された「慰安所」関連証言の特徴から分析した。既存の研究が沖縄戦を第32軍が沖縄に上陸する1944年から始めるのに対し、本研究では、「慰安所」が初めて設置される1941年からの対象にしている。従来地上戦中心で語られてきた沖縄戦は、朝鮮人という新たな観点で捉え直すと、「飛行場建設」という海軍の歴史を踏まえた。1941年から考えなければならないと、筆者は考えている。当初飛行場建設が中心であった沖縄の「要塞化」が、持久戦へと変化しながら、むしろ、「慰安所」関連規定は細かく決められていき拡大していった。本研究ではその「慰安所規定」が、日本軍の住民観、つまり、総力戦上に労働力としての協力を求めながらも、住民を「スパイ視」して行った住民に対するまなざしと関連性を持つものであることを、第二部で軍の資料や規定を中心に、日本が沖縄に設置した15の飛行場のなかの主な飛行場の変遷を追った。

日本軍の飛行場は1944年10月10日空襲により徹底的に米軍の攻撃対象となった。その時那覇の90%が焼けの原となったとされる。

その体験は住民に、初めて戦争の恐ろしさを示す出来事でもあった。第三部では(6章、7章)、まず、この10.10空襲前後、住民側から米軍による「強姦恐怖」の言説が広まっていた点を明らかにした。また、それをむしろ軍が捕虜となることを防ぐためのポリティクスとして利用していることを示した点、つまり、日本軍のポリティクスそのものであったことを指摘したうえで、それがそのまま戦後直後の米軍による「強姦恐怖」から逃れるための、住民側自らの「加害性」を引き起こすポリティクスと化される過程を分析した。最後に、「慰安所」は結果的に米軍の上陸がない島にも建てられている。宮古島における「慰安所」の特徴を通し、軍の住民管理のポリティクスとして採用された側面を分析した。アジア太平洋戦期、朝鮮人「慰安婦」は確かに他者であった。しかし、米軍上陸が結果的にない島においても「慰安所」が住民の生活空間に密接に関わるだけでなく、住民を管理する一つのポリティクスでもあった。このポリティクスを問う時にこそ、国家、人種、民族、階級、あるいは性などを根拠とする枠組みが誕生する際に、そこから外されている人間の存在を浮かび上がらせるものであると考える。

【主要参考文献】一次資料

『船舶軍(沖縄)留守名簿』『石兵団会報』『陣中日誌』第3475部隊『内務規定』A12 23 November 1945 Subject: Report of Military Government Activities from October 1945